

遊天瀧記 (二)

勉強会令和四年二月四日(担当 俊彦 左起子 繁子 良子)

其勢猛欲襲人、而佇立之間、使我目眩魂奪、於是踞石籍艸、喫飯酌酒、既而氣定神清、塵氛一洗、胸次廓然、自覺身世俱輕、蓋余平生身至異境、輒心生異趣、不堪欣快、是故每聞名山絕壑、泉石幽勝之地、未嘗不至、則徘徊顧望、踟躕吟詠、殆如不欲還、是日亦以償余平生之志云、

青谿居士緝記、

読み

其の勢い猛しく人を襲わんと欲す、佇立の間、我をして目を眩ませ魂を奪わしむ。是において石に踞り艸を籍み、飯を喫い酒を酌む、既にして、氣は定まりて神聖、塵氛は一洗し、胸次は廓然とす、自から身世俱に輕くを覺ゆ、蓋し余平生の身は異境に至る。

輒ち心異趣を生じ、欣快に堪えず。是故に名山絶壑、泉石幽勝の地を聞く毎に、未だ嘗つて至らざるにあらずかな。

至りて則ち徘徊顧望、踟躕吟詠、殆還るを欲せざるが如し。この日また、以て余の平生の志を償うと。云、

青谿居士緝記す

訳

そのいきおいは激しく人を襲わんとしているようだ。佇んでいる間、私をして目を眩ませ魂をうばわんとしているようだ。ここにおいて、石に座り、草を敷いて飯を食い、酒を飲む。

すぐに気持ちは落ち着き、清らかな神聖な気持ちになり、けがれた気分は洗い流され、胸の内はわだかまりがなくなすすっきりとする。身も世も共に軽くなったような気持ちだ。私の普段の身は異郷にあるようだ。

たちまち心は普通でない趣になり、喜ばしい気分になる。だから名高い谷や川の流れや岩石の名所のことを

(次の解釈議論中)

- ・聞いても、ここに至るようなものはない。
- ・聞くと、行かずにはいられなくなる。

満足していると、回りを歩いてみたくなり、優れた景色の中で、詩を詠う。もう帰りたくないと思ふ。この日もまた、私の普段の志を満たすものであった、と云々。

青谿の隠者 緝記す

註・言葉

欲〓(せ)ント ほつス(ほつす)「今にもしようとする 踞〓尻を降ろ

して座り込み 籍〓セキ 下にしく。▽「藉セキ・シヤ」に当てた用法

艸〓ソウ 草と同じ 塵氛〓ジンフン けがれた気分 神清〓シンセイ

※神聖と同じではないか 胸次〓キョウジ 胸の中 廓然〓カクゼン

がらんとして広くあいている 身世〓シンセ この身とこの世

輒〓すなわち 異趣〓イシュ 普通でない趣き 欣快〓非常に気分がよ

く喜ばしい 絶壑〓ゼツガク 切り立って深くて険しい谷 ×壑

○壑 泉石〓センセキ 泉と岩石 幽勝〓ユウショウ 静かで

すぐれたけしき 顧望〓コボウ 振り向いてみることに

躊躇〓コウショウ 静かで優れた景色 償〓ツグナウ

云〓デン という、居士〓コジ 学徳が高い隠者